

巨木・鈴木 尚先生

香 原 志 勢

鈴木 尚先生は、一九七六年（昭和五一年）三月、国立科学博物館を退官され、同年四月に成城大学教授となられた。博物館在職は、東京大学を停年退職後のわずか四年間であったが、その間に人類研究部新設という大仕事を果された。同館をやめられるにあたって、記念講演をなさったが、それは「私の人類学五〇年」（『自然科学と博物館』四一一、一九七六）という文になっている。それによると、「昭和二六年、この時が、私の研究にとって大きなステップとなった。たまたまその年の六月、研究上の必要から解剖学教室の標本室に入ると、いまだかつて見たことのない不思議な頭骨が二〇個近くも標本戸棚の外に並んでいた。」翌年になって、その頭骨が江戸時代のものであることがわかったのであるが、これが、縄文時代から現代に続く日本人骨格の変遷という先生の大研究の発端であった。

この昭和二六年（一九五一年）は、私ども四人が東京大学理学部人類学科を卒業した年であり（四人というのは、同科ではまれにみる多人数クラスである）、人類学を一生の仕事とするようきめた年である。それだけに身近な人びと、とくに師匠の動きにはいっそう敏感であったが、たしかに、その頃から先生の目の色が変わり、非常に意欲的

に研究にとりくまれてきたように思う。あえて申せば、先生はそれを機縁にぐんぐんと成長し、そして今日にみられるような巨木に到達されたのである。このような表現は、いっばんには、師匠が弟子についていうことであって、およそ弟子が師匠に対して口にすべきことではないであろう。しかし、私どもは人間を客観的に観察することを本務とする人類学者であるという理由で、先生の退職の記念として古稀の祝いにもかかわらず、私どもが知りえた先生の半生、そして、文字どおりの人となりをつりかえてみたい。

先生は最後の明治、一九一二年に埼玉にお生れになり、その後、七年制高校として秀才の集った旧制東京高等学校尋常科に入学された。そして考古学に興味をおぼえ、東京近郊をさかんに発掘されたという。東京帝国大学医学部を卒業後、解剖学を専攻されたが、アイヌ人骨研究で世界に知られた小金井良精名誉教授の知遇を得て、骨の研究に没頭された。その後、人類学教室の長谷部言人教授にとくに求められて、同教室の講師となり、翌年、三才で助教授に昇任された。私どもが人類学科に入学したときですら、若冠三六才の助教授であり、しかも教室主任であった。

若くして、伝統ある教室をまもらねばならないということは、さまざまな点でたいへんであったろう。その一つとして、長谷部先生は、現役引退後もしばしば教室に來られて、研究を続けておられ、教室の談話会にも出席された。たまたま、その日は鈴木先生の発表の日であったが、発表がおわると、長谷部先生は、鈴木先生に「そんな研究はつまらんよ。やめなさい」と、ことはげしく講評された。私どもはまさにたまげた。教室主任が教室員や学生の面前でその研究を否定されたのである。もちろん、それは長谷部先生の一途な気性のあらわれであり、これはよく働けば教室員に強い刺激を与えるものであった。鈴木先生は黙って、じっと耐えておられた。ち

なみにその時の鈴木先生の発表は、頭蓋骨内面にのこる動靜脈溝の走行についてであった。

しかし、その研究はつまらなかつたであらうか。いや、とんでもないことで、そのようにたえず骨を眺めておられることで、手もとの骨の特徴をすっかり把握されていたのである。後年、もれうかがつたことであるが、先生は御自分の標本に花子とか、太郎とかひそかに名前をつけておられていたという。命名することによって、それらの骨のすべてに精通されていたのである。人びとには同じにみえる骨の顔を、先生は個別に何千となく見わけておられた。若くして、「骨の鈴木」の名は天下にとどろいていたのは、こういうところに秘密がある。

一九五二年、松本で人類学会があつたが、そのさい、先生は日本人の鼻の時代的變遷について発表された。それをきいて、ある民族学の大先生が、「時代によって、鼻が高くなったり、低くなったりするという。鼻のようない計測値が小さいものについて、そんなにきれいに結論を出せるのか。第一、牧畜民とか、その他について調べたのか。イージー・ゴーイングである」と、詰問調の質問があつたのを、私ははつきりとおぼえている。

翌一九五三年、鎌倉材木座で中世人骨が鈴木先生の手で発掘調査された。多数の骨が続々と出土し、なかには、頭骨だけが直経一メートルほどの円のなかにぎっしり積まれていることもあつた。発掘がおわると、海岸に近い、この砂地はぼっかりと凹んでいたが、そのことで、いかに大量の骨が埋藏されていたかがわかるであらう。当時、大学院学生であつた私の指導教官は鈴木先生ではなかつたが、興味があつたので、私はこの発掘には積極的に参加し、いろいろ得るところがあつた。そして、発掘の成果はその年、札幌で開かれた人類学・民族学連合大会で発表された。鈴木先生はその中で、これらの頭骨がいちじるしく長頭であること、日本人の頭の形は時代とともに變るのではないかということを強調された。会場は質問で大騒ぎになり、とくにこの問題のため、一時間をべ

つに用意されることになった。のちに、先生はこの一時間のつるし上げには神経がまいったと述懐されておられるが、そのときの先生の態度は紳士的ではあったが毅然として、痛烈な質問にも一步も引かないようにみえた。それまで、人類学の世界では、頭長幅示数が絶対的に重視されていて、それをもって人種や地方差の比較がおこなわれることすらあった。それが時代によって変るといっているのであるから、問題が大きくなるのは当然である。以後、数ある学会において、この時間以上に白熱した討議に接したことがないのは、また淋しくもある。

鈴木先生の提起された問題は短頭化現象にかかわるもので、ちょうどその頃、世界各地で同じような現象が気づかれはじめていたのであるが、鈴木先生はまったく独立にこれに注目なさっていたことになる。頭の形の生物学的意義は解明されていないが、それにもかかわらず、それは神聖視されていた。鈴木先生の鋭くすなおな目はこの頭骨神話をうち破ったのである。

この頃から、先生は各地をまわり、骨蒐集の情報組織をつくられる。こういう努力は実験室や書齋で研究を続ける方にはとうてい理解できないであろう。時間と努力の相当部分がこれにさかれなければならない。いわゆる利口者にはできる仕事ではない。先生はこれを忍耐強く、しかも熱意をこめてなさった。その結果が日本の洪積世人骨の発見である。その一つ、牛川人というのは上腕骨の破片にすぎないが、これを丹念に解析した論文を読んで、ある地質学者が感嘆した。彼はそれまでは鈴木先生に面識がなかったが、さまざまな理由から、何となく批判的であった。しかし、以後、その態度を一変させたことはいまでもない。つまり、それは鈴木先生の学問に対する態度がつねに正攻法であり、手固いことを意味している。鈴木先生は骨一辺倒だといわれていたが、日本人骨格変遷史にかかわる論文を拜見すると、人びとの生活の歴史も豊富にとりいれられて、非常に納得しやす

いものとなつてゐることに気がつく。

イスラエルのアムッド洞穴におけるアムッド人の発見は輝かしいものであり、よく知られているので略するが、ここで述べたいことは、鈴木先生は幸運であるということ、これは御自分も認めておられる。アムッド人発見はその最たるものに数えられよう。しかし、運がよいということは能力なのであつて、幸せのただ取りではない。じつさいは多くの人はその幸運の前をふりかえりもせず通りすぎていく。しかし、幸運な人はそれを見抜く観察眼があり、些細なこともおろそかにしない。人びとがぼんやりしている間に、たえず手探りしており、たいへんな努力をなしているのだといえよう。その意味でなら、鈴木先生を幸運な人であるといつてもよい。世に、運・鈍・根というが、鈴木先生はそれを総に描いたような方である。鈴木先生の後任になつた科学博物館の山口敏部長は、しばらく同室の研究生活をしたさい、つくづくと鈴木先生を観察して、感心した。「電話に出て席もどつたあと、私なんかついタバコなど口にしてしまうのだが、鈴木先生はさつともどつて来て、そのまま前からの作業を続けておられる。細かなことだが、まねできない。」さよう、先生はものに打ちこめる方である。そして、それが今日の巨木にまで伸びられた原動力である。そういえば、春夏秋冬で成長速度に遅速のくりかえしがあるが、木はたえず成長し、休むことなく年輪をましている。

人類学以外の分野でも、先生の性向は同様に発揮された。日本学術会議の会員になられると、公平かつ誠実につくされるが、ついには同会議でももっとも難かしいといわれる第四部（理学）の部長にまでなられ、さまざま難問をまとめられた。人類学という、ごく弱小な分野出身でありながら、やがて改選期になると、次回の推薦を固く拒まれた。たまたま私は人類学会の理事をしていたが、理事全員が「人類学のためにも、学術会議のため

にも」といって懇請した。しかし、「これ以上つとめたら死んでしまう。命の問題ですよ」とおっしゃった。先生はいい加減なことでものをつとめられることはなかった。そして、一九七三年には永年の人類学研究に対して紫綬褒章を受けられた。

先生の出られた旧制東京高等学校はジュラルミン高校といわれるが、先生には土に根ざした底力を感じる。発掘生活五〇年のせいであろうか。そういえば、先生の母方の御郷里は植木の安行であるときく。先生の御趣味は植木であり、庭いじりである。学会が鹿児島であったさい、そのあと屋久島に先生御夫妻も私も一同とともに旅行に出かけたが、そのさい、いろいろ植物を採集されて、もちかえられたのをよく覚えてる。そのさい、先生のお顔は上気して、少年のようにみえた。

七〇才をすぎて、先生は公職にはおつきにならず、研究にうちこまれるという。先生の御健康と御関心からすれば当然なことであろうが、たいへん喜ばしいことである。大木はさらに成長し、若葉を身につけ、美しい花を咲かす。夏には人びとに涼しい木かげを提供し、四季を通じて、安定感を与えてくれる。屋久島の縄文杉にくらべられるような、壮健にして雄大な御繁栄を、先生のために祈りたい。

本文を起草するにあたり東京大学理学部人類学教室の遠藤万里助教からいろいろ御意見もうかがった。また成城大学経済学部学生の檜崎修一郎君より資料の提供をうけた。記して感謝を捧げたい。なお、先生の筆になる「私の人類学五〇年」を大いに参考にさせて頂いた。成城大学には非常勤講師としてつとめているにすぎない私に、恩師を語る機会を与えて下さったことにつき、成城大学経済学会にあつく御礼申しあげる。